

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

体育大会の際の応援団の旗づくりを通じた縦割り活動の充実を図っている。美術の時間にデザインを考え、優秀作品を決定し、各クラスで作成する際の作業の流れを説明した。縦割り活動で生徒が主体となって情報を共有し、作成に向けて取り組んだ。縦割り活動を通して、上級生が下級生に制作の方法やアドバイスを伝え、下級生が上級生の作成の様子を見ながら作成にあたった。縦割り活動を通して、生徒が体育大会に向けて高揚感を味わうことができた。応援団の旗を作成するという同じ目標に向かって取り組み、日常的に交流する機会が少ない学年を越えたきずなを育むことができた。また、他学年と共に応援し合えることは、学校行事における不安感を軽減し、学校行事を前向きに取り組む環境を整えることになっている。



〈左から中学校第1学年、第2学年、第3学年の作品〉

【取組2】(B中学校)

第3学年国語科の授業では、生徒が自己決定の場を提供できるよう、生徒が互いに話し合う時間を設定した。また、話し合った後には自らの意見を発表できるようにした。生徒は、考えの異なる多様な意見に触れる機会が充実しているため、全員が意見を出し合った。こうした取組を、第1学年から積み重ねており、分からないことがあった場合には、辞書等を活用して自ら調べ、考えを深めるようになった。

【取組3】(C中学校)

不登校対応巡回教員が、全ての巡回担当校で校内研修の講師を務めることが難しい場合もあったので、各校の教員に講師を依頼した。不登校の未然防止に係るアンケートの結果を基に、研修の内容を事前に作成し、講師を依頼した教員に研修内容の調整を行って校内研修を実施した。

各校の教員が講師を務めたことで、各校の実態に基づく課題について研修で取り扱うことができたため、その後の取組を円滑に進めることができた。校内研修の内容を効果的に周知できた事例となった。

多様な学びの場を確保する取組

(「早期支援」及び「長期化への対応」の取組)の推進

支援会議 (C中学校)

校内委員会と登校支援委員会を分けて実施していた体制を見直し、情報共有のためのケース会議と、生徒への具体的な支援策を考える会議とに整理し直して運用するよう提案・支援した。これにより、生徒一人一人の状況に応じた具体的な対策を検討しやすくなり、迅速な対応が可能となった。

アウトリーチによる支援 (D中学校)

学校から自宅までの距離が遠く、欠席日数が多い生徒に対し、学校と家庭との連携を強化するための支援を実施した。例えば不登校対応巡回教員が、家庭訪問時に面会したり、不在時には学校からの資料をポストに投函したりした。また、校内相談室等につながることもできるような生徒の状況に応じた支援を行った。

校内別室における支援 (C中学校)

居心地の良い校内別室の環境を整えるため、畳の上でリラックスできるスペースを整備した。校内別室での学習で疲れた時などに、畳に座ったり寝転がったりするなどして校内別室での過ごし方を生徒が選択できるように支援した。

また、校内別室を利用する生徒のために、第1学年から第3学年までの数学・国語の振り返りプリント(各学年10枚程度、単元のまとめテスト各1枚)を設置して、学び直し等に活用した。



デジタル機器を活用した支援 (C中学校)

校内別室の登校の際に教室授業に参加できるオンラインによる双方向型の学習環境の仕組みを整えた。生徒の希望に応じて、教室に一人1台端末を設置して実施した。校内別室から集団での学びにつながるステップになっている。教科担当の教員と校内別室を利用する生徒とのつながりにもなっている。

関係機関との連携 (D中学校)

不登校対応巡回教員は、小学校から不登校が続いていた生徒を教育支援センターにつなぎ、家庭以外の居場所を確保した。その後、校内別室への登校を継続し、教育支援センターも生徒の状況に合わせて活用した。生徒の意向を確認しながら、過度な負担にならないよう支援を継続している。

成 果

各学校の取組に「居場所づくり」、「きずなづくり」という視点を取り入れて改善を図った。また、校内別室を利用していた生徒が、教室への復帰につながるきっかけをもてるようになった。

課 題

校内別室の利用を希望する生徒に対して、より柔軟に対応できるよう校内体制を整え、多様な学びの機会を増やしていく必要がある。